君はお星さま

お空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君はお星さま

【Ｎコード】
Ｎ８７４４Ｙ

【作者名】
お空

【あらすじ】
美穂子には、お堅い姉・沙織ちゃんがいる。そんなお堅い姉にも彼氏がいるらしい。そして美穂子姉妹には生き別れの兄がいて…。

1夜（前書き）

とりあえず完結できるよう、頑張ります。
どんな感想でも歓迎します。

1夜

「食べちゃダメ」

クッキーが乗ったお皿に手を伸ばす私に、沙織ちゃんが言った。

「えへへ、すんません」

笑って誤魔化したつもりだったが誤魔化しきれてなかったようで、沙織ちゃんがしかめっ面を浮かべた。

「それはコースケくんにあげるんだから。美穂子は食べちゃダメ」

美穂子とは私のことだ。

「沙織ちゃんはお堅いなぁ」

「あのねぇ…」

沙織ちゃんがどうして呆れた顔をするのかと言うと、私たちは姉妹だからだと思う。おそらくだけど。もちろん沙織ちゃんがお姉さんで私がしょうもない妹なのは言うまでもない。

「コースケくんとは良い感じい？」

「あったり前よ。だからクッキー作ったんでしょうが」

「案外、仲直りのクッキーだったりして」

私はニヤニヤすると、沙織ちゃんは怒ったように「あほ」と言ってラッピングし始めた。

「すきありー！」

コースケくん宛のクッキーを1つ口に放り込んだ。

「…もう」
沙織ちゃんがやっと笑った。
たくさんのクッキーが入っているラッピング袋にリボンが付けられた。きっと愛も入っているんだろうと思った。
クッキーは何だかしょっぱい感じがしたけど、ほんのりと甘かった。
そして私のせいで沙織ちゃんはコースケくんにクッキーを食受け取ってもらえなかった。

＊

私は姉の彼氏に会ったことがない。見たこともないし、どんな人なのかも知らない。
知っているのは、名前だけだ。
それ以前に、聞いても教えてくれないだろう。沙織ちゃんは何でも喋る方じゃないということは十分に分かっている。
そんなことを考えながら、私はポテトチップスを右手に、アルバムをめくっていた。
自分の部屋で、机に向かう光景は珍しい他ない。
プラスチック性のアルバムには、私と沙織ちゃんが乗っている写真ばっかりだ。
撮っているのはお母さんで、お母さんがのっている写真は１０枚中１枚くらいの割合だった。
私達には生き別れのお兄さんがいたらしい。

そのお兄さんは、お父さんが引き取ったんだとか。
お父さんとお母さんの離婚が原因だと思う。
女手１つで私達を育ててくれたお母さんはやはり尊敬している。
生き別れのお兄さんはどんな人なんだろう。

2夜

私は英語勉強をしていた。
これを沙織ちゃんやお母さんが見ると「雹でも降るのかな」というだろう。

久しぶりに学校の宿題でもやってやろうかな、と思ったのだ。
来年は受験（そうそう、私は中2で現在、ガキなお年頃）で勉強が忙しくなることは目に見えている。

次のページに進むと同時に、電話がかかってきた。
沙織ちゃんからだった。
邪魔する気かと苛立ったけど、気分転換（早すぎるのは言うまでもない）に良いかなと思って電話に出た。

『もしもし？』
沙織ちゃんは電話越しだと、お母さんの声に聞こえる。

「うん、どうしたの？」
『今夜帰れないってお母さんに言っといて！』
急いでいるような口調だった。
コースケくんとのデート中なんだろう。お泊まりかぁ、へぇ、そりゃ高校生だもんなと思いながらも、

「ええっ」
と私は驚いた。

『何よ。そんなことよりさっさと宿題終わらせなさいよね！』
「今やってる」

『はぁ、何て？』
聞き直されてしまった。

「今英語やってる！」
『はい嘘ね』
速答された。

「ホントだってばー！」
『あーはいはい、じゃあね』
そう言われて通話が終了した。

珍しがられるどころか信用してもらえなかったし、くそ。
むっとして携帯を閉じた。

それにしても沙織ちゃん、今日は帰ってこないのかと先程の会話を思い出す。
コースケくんと、ああいうことするんだなと想像してみる。
妄想より、お母さんが何て言うかが問題だと現実にかえる。

面倒だなぁ――。
それから宿題に再びとりかかった。

＊

沙織ちゃん朝帰り事件から3日が経った。
お母さんには私から友達の家でお泊まりに行ったんだって、と適当に言っておいたから沙織ちゃんがビンタをくらうようなことはなかった。
全く、良い妹だなと我ながら思う。

今日は沙織ちゃんが塾でお母さんは仕事で夜は私1人だ。
毎週月曜日はいつもこんな感じで、私の幸せな一時である。
辛い月曜日も、乗り越えられるところが最高に良い。

テレビを独占していると、インターホンが鳴った。

それが全ての始まりなんて、知る術もない。

3夜

なんか来た。
そう思って受話器をとる。
「はぁい」
『中村です』
「はぁい」
私は口調を変えなかった。
面倒だからに過ぎない。
中村って誰なんだろう。
とりあえず、玄関に向かった。

サンダルを履いてドアを開ける。
「はいー」
語尾が上がってしまい、おばちゃんみたいだなと自分で笑いそうになる。

「あの…沙織さんいますか？」
目の前にイケメンの男のコがいた。高校生ぐらいで、ブレザーを着用している。可愛らしい感じだけど、男らしい肩をしていてカッコイイと思った。

「え…あぁ、塾…ですけど…」
イケメンを目の前にして、さっきの態度が恥ずかしくなった。

「そうですか、ありがとうございます」
しょんぼりした態度に、襲いたい！という衝動に駆けられる私は変態なのだろうか。

「いえ」
私は短く答えた。
このイケメンにこれ以上羞恥を晒すわけにはいかない。
「あれ、もしかして…沙織の妹？」
イケメン立花の声が急に地声になった。地声もイケメンボイスで格好よろしい。
「はい、そうですよ」
私は敬語を保ち続けた。馴れない敬語を喋ると声が震える気がする。
「やっぱ？似てるな」
「そうですかぁ？よく言われます」
「ははっ、声もそっくり」
「中身は似てないですけどね！沙織ちゃんの秀才は輝かしいです」
イケメン立花は笑った。
笑った顔は私のハートを捕まれた。思いっきり、わし掴みで。
「へぇ、ていうか沙織ちゃんって呼んでるんだ？」
「呼んでますよー！友達は珍しげに私を見るんですよ！」
「妹が姉貴をちゃん付けかぁ」
「はい」
キモがられた！と後悔した。
「カワイイな」
イケメン立花が言った。
マジですかい。
「い、いや、そんな…」

「ん？照れてる？」
「照れます」
「マジかよ、ねぇ携帯持ってる？」
「はい、持ってます」
キタッー！人生最大の幸運だと感じた。
「アド交換しよ」
「うん！…じゃなくて、はい！」
「タメでいいよ」
ふっと、イケメン立花が微笑む。少しだけ白い歯が見えて非常に素敵だ。

キュンというか、何かが私の心を貫いたような感じがして、なんだか胸がときめいた。

4夜

あれからイケメン中村と毎日メールをするようになった。
内容は「今何しているの？」や「好きなタレントは？」等の初歩的なことだ。
毎日と言ってもまだ3日目である。

水曜日は、いつも憂鬱だった。それは単純に沙織ちゃんがいつもテレビを独占し、私は１９：３０から塾だからだ。

私はよくドラマを見る。
沙織ちゃんもよくドラマを見る。そこまではいいのだけど、見るジャンルが全然違うし、おまけにお互い裏番組を見たがる。
録画すればいい話なのだが、やはりリアルタイムで見ることを争うのだ。
今日も、ドラマが放送される時間になった。

沙織ちゃんがテレビの前でリモコンをいじっている。

「沙織ちゃん、なぁにしてんの」
私は寄った。しかし避けられて、
「ドラマ見ようと思って」
沙織ちゃんは私と目も合わせない。

「そうなんだぁ」
「美穂子は勉強しなよ。来年は受験でしょ」
「うん、そうだね。勉強してくる」
私はそう言ってリビングを離れ、自分の部屋に戻った。
砂時計を逆さまにして、3分待った。最後の一粒が落ちていく。

再び、リビングに向かった。
沙織ちゃんは冷蔵庫で何やらジュースを探しているようだった。
今のうちにテレビを占領するのが狙いだ。こっちは先週、沙織ちゃんに負けてしまい、前回を見ていない。今回こそは絶対に見る！
リモコンが辺りになかったので、テレビ本体の方からチャンスを変えた。

「あぁ！」
沙織ちゃんが気付いた。
「すきありだぜ！」
私はテレビに背を向ける。
「やっ…やられた」
呆れた声を出していた。
「今日は主人公が彼氏にフラれる回なの！」
私は言った。
そう、私が見るのは恋愛ものだ。沙織ちゃんはよくサスペンスを見ている。
「…へぇ」

この夜は珍しく、沙織ちゃんと一緒に恋愛ドラマを見た。
そのとき、インターホンが鳴った。中村さんだったらいいのに、と感じた。同時に、沙織ちゃんに出てほしくないと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8744y/

君はお星さま

2011年11月29日20時56分発行